

1 はじめに

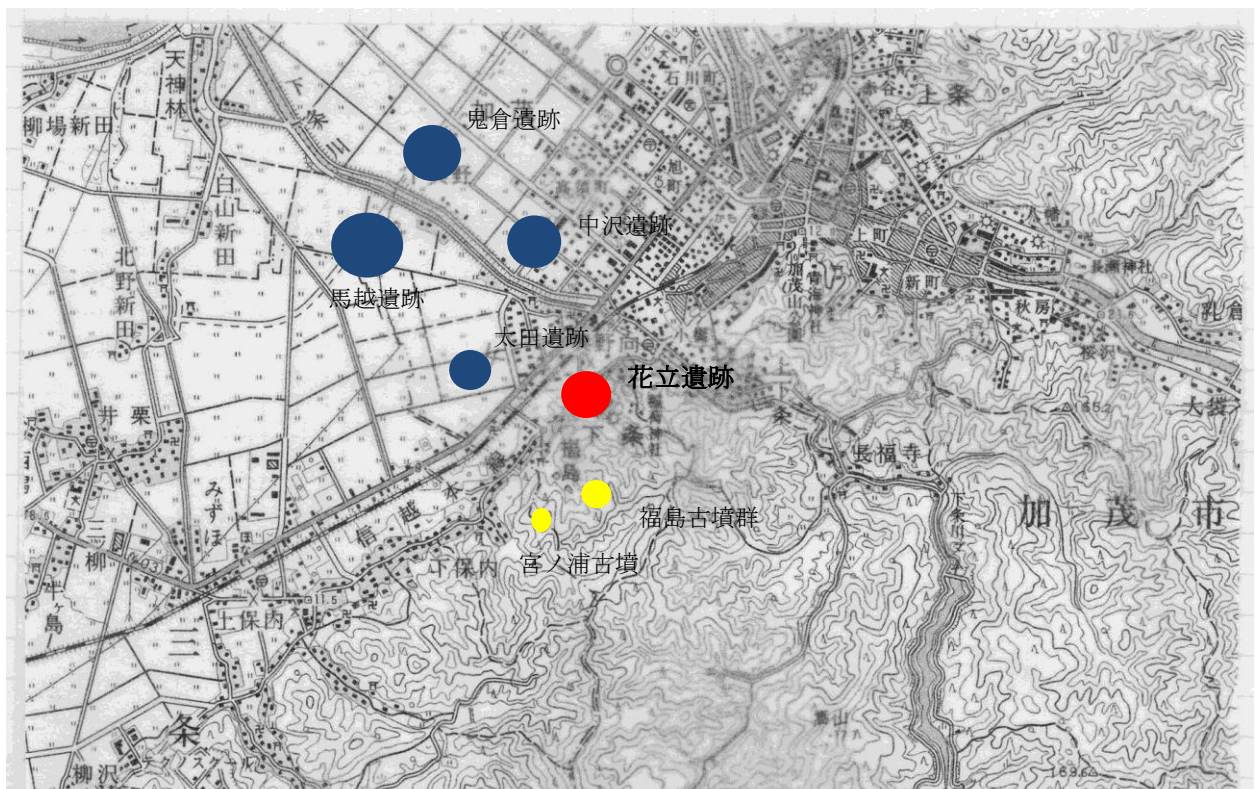
花立遺跡は加茂市大字下条字福島地内に所在します。遺跡は平成5年に登録されました。市道福島線建設工事に先立ち、令和元・2（2019・20）年度に行った^{かくにんちようさ}確認調査の結果、道路建設予定地内に遺跡がひろがることが明らかとなり、加茂市教育委員会が主体となり、令和2年度約914㎡、令和3年度約469㎡の^{はつくつちようさ}発掘調査を実施してきました。令和4年度の調査面積は約682㎡です。

2 立地と周辺の遺跡

花立遺跡は下条川左岸の丘陵縁辺部に位置し、緩やかな傾斜を持つ^{びこうち}微高地に立地します。現在の水田面の標高は約13m前後です。

下条川流域には多くの古代の遺跡が確認されています。発掘調査された遺跡は右岸側で^{おにくら}鬼倉遺跡、^{なかざわ}中沢遺跡、左岸側では^{うまこし}馬越遺跡、^{おおた}太田遺跡があります。ほとんどが8世紀中頃に集落が開発され、9世紀中頃～後半を主体とし、10世紀前半頃まで継続しています。

花立遺跡の後背部の丘陵には^{みやのうらこふん}宮ノ浦古墳（1基）、^{ふくしまこふんぐん}福島古墳群（5基）が所在します。



花立遺跡と周辺の遺跡位置図

3 遺構について

大小様々な遺構が約300ほど見つかりました。昨年度の調査区と同様に遺構の密集度が高く、集落の中心区域に相当すると考えられます。今年度の調査区で特筆される遺構は、大型の掘立柱建物ほったてばしらたてものです。規模は梁行2間（約5.9m）×桁行4間（約7.9m）以上で、平面積が50㎡を超えるものと推測されます。柱穴の掘り方も大きく、平面形は方形に近いものです。遺存した柱根も方形に近い形状に成形されています。規模や形状から集落の中心的な建物のひとつと考えられます。令和2年度の調査区で確認された掘立柱建物ほったてばしらたてものは平面積が約18㎡ですから、その約3倍近い大きさの建物になります。また、主軸を南北方向にとり、これまで調査された溝などと向きが同じことから集落全体で共通の方位観が採用された可能性があります。この他にも、柱根ちゅうこんがのこり、等間隔に並ぶ柱穴がいくつかあることから、複数の建物が存在したものと推測できます。

また、大型の土坑（長軸約4m×短軸約2m）が注目されます。南北方向に長い楕円形で、覆土に炭化物や焼土が多量に確認できます。ゴミ穴の可能性があり、大型の掘立柱建物ほったてばしらたてものに隣接した場所にあり、同時に存在した遺構が慎重に検討する必要があります。

4 遺物について

多量の須恵器すえき・土師器はじきが出土しています。須恵器は大半が佐渡の小泊窯産こどまりようのもので、年代は平安時代の9世紀中頃が中心です。須恵器の無台杯や有台杯などの食膳具が多く、土師器の甕・鍋などの煮沸具が少ない印象です。墨書土器は少なく、これまでも多く出土している「上」の字があります。量は少ないですが古墳時代の土師器や縄文土器も数点出土しています。

土器以外では、土錘どすい（漁網ぎよあみに付ける錘おもり）や砥石といしなどが出土しました。

5 まとめ

花立遺跡は「田口〔領カ〕」（郡雑人で郡司が在地の有力者を任命し、田地の管理を行った人）や「口粟生田」・「下粟生田家」（三条市保内地区にあったとされる中世の粟生田保あおうだにつながる地名）などの墨書土器からも農業経営の拠点で、本地域の開発を主導した有力者の集落と考えられます。今回確認された大型の掘立柱建物ほったてばしらたてものは有力者に関係した施設と見られます。

最後になりますが、今回の発掘調査並びに説明会を開催するにあたり、近隣にお住いの皆様、関係機関の方々、㈱日立ニコトランスミッション加茂事業所様から多大なご協力を頂いております。この場をお借りして感謝申し上げます。